

逃亡

自惚れの傷口を押し拵げ
静かなる離反は快楽の周りを
唾棄と嘲笑のうちに酔っばらい
死ね、死ねと白い頸を絞めるのだ

反逆と形式に蒼ざめた顔に
焼きごてにて腐敗の烙印を押し
ただれた皮膚を冷たい雨が揺らし
かじかんだ指が、ああ、もう動かない

何処まで歩けば行き着けるのか
死よりも確かな終末に
感情の消滅、存在の消滅に
生命に追い立てられるのは、ああ、もう御免だ

凍えるような微風に優しくも
氷のような、霧のような雨が
私の生命の証しをことごとく濡らし
貧しく慄えさせてなお、存在を強いる

ああ、行くがいい、この北の平原を
私に死など訪れるはずもない
ああ、行くがいい、何処も同じだ
私に死ねるはずもない

(1985.3.21)